

学習障害児の聴覚・言語理解面の検討

(分担研究者 竹下 研三)
研究協力者 進藤美津子¹⁾
共同研究者 玉井ふみ¹⁾, 山崎和子¹⁾, 城本貞子¹⁾・冨田 豊²⁾

要約：学習障害児の言語障害と指導について検討するにあたり、話しことば（聞く・話す）の特異的な学習困難を示すいわゆる言語性LDの聴覚的言語理解の問題について検討を行った。幼児期の言語発達の遅れ、算数課題の低下が共通しており、聴覚的言語理解障害の要因として、①抽象語や構文の習得など高次象徴機能の発達の遅れ、②聴覚的情報の継時的処理能力の低下などが考えられた。さらに思春期・青年期に達した学習障害児の聴覚的言語理解障害について検討を行い、その背景に聴覚的言語記憶の問題や談話の理解と表現の問題などいわゆる high-level language の障害が考えられた。指導法については、個々の子どもの状態に合わせ不得意な聴覚面を視覚面や身体感覚で補い、身振りや絵・文字などを取り入れるなど、子どもの得意な面を活用していくことが必要である。

見出し語：学習障害児、言語発達の遅れ、聴覚的言語理解障害、指導法

研究目的：

学習障害児の言語障害と指導法について検討するために、言語理解力・表現力に遅れがみられ、WISC-Rで、PIQとVIQの差が20以上を示す子どもの聴覚的言語理解の問題点および指導上の留意点を検討する。さらに思春期・成人期に達した学習障害児の持つ聴覚的言語理解の問題を検討し、社会適応上の配慮事項について考察する。

研究方法：

1. 幼児期に言語理解力・表現力に遅れがみられ、WISC-Rで言語性課題の低下がみられた6名の対象児について、聴覚的理解力を精査し、聴覚的理解障害の要因および指導法について検討する。

表1 対象児

症例	性	検査時年齢	VIQ	PIQ	言語の特徴
1	F	5:3	63	100	言語理解力の遅れ、抽象語が入らない
2	M	5:6	58	92	言語理解力・表現力の遅れ、構音障害
3	M	6:6	84	107	言語理解力・表現力の遅れ、語彙少ない
4	M	6:6	89	132	言語理解力・表現力の遅れ、構音障害
5	M	13:2	89	116	言語理解力の遅れ、作文が苦手
6	M	15:8	65	91	言語理解力の遅れ、読書・作文が苦手

2. 聴覚的言語理解の問題を有し、思春期・青年期に達した学習障害児2名に聴覚および言語・認知検査を行い、理解障害の要因および社会適応上の配慮事項について検討する。

1) 症例1：19歳男子。右利き。幼児期は多動であり、自己中心的な行動や固執傾向がみられ、エコラリアが目立ち、いわゆる広汎性発達障害の傾向を呈していた。学童期には語義・語用欠陥症候群に相当する状態であった。青年期になっても、形式的機械的な思考は可能であったが、抽象的思考が困難であり、意味理解障害は持続していた。普通小学校・中学校を経て私立の商業高校を卒業した。

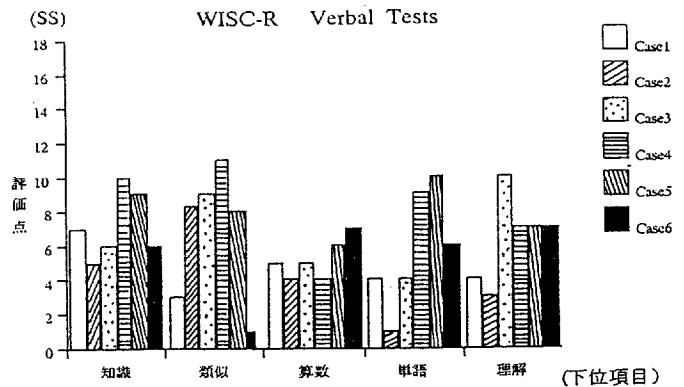


図1 WISC-Rの結果

2) 症例2：27歳女子。右利き。言葉の意味を理解することが難しいという本人からの訴えがあった。既往歴では、16歳時、下肢の温度感覚の障害、めまい発作がみられ、18歳時にバランス障害や視野障害がみられ、多発性硬化症と診断されステロイド療法を受けていた。幼少時より、人の言葉を理解するのが遅かった。暗記は得意であるが、理解して覚えるのが苦手であった。音楽、美術は得意であったが、国語、英語、社会が苦手であった。普通高校を経て短大の栄養学科を卒業した。

研究結果：

1. 言語理解・表現力に遅れがみられたケース

1) 6名のWISC-Rの結果は、表1のようにいずれの児にも言語性のIQの低下がみられた。図1に示すように下位項目別に比較すると、個人差はあるものの、“算数”の評価点が共通して低い傾向を示した。

2) 理解語彙の発達を調べる「絵画語彙発達検査」では、検査を実施できた2名(5歳児と6歳児)では、いずれも1歳半から2歳の語彙発達の遅れがみられ、具象名詞と比べて抽象語の理解に遅れが目立った。

3) 「失語症構文検査」による構文の聴覚的理解の発達は、検査を実施できた2名(5歳児と6歳児)では、いずれも2歳～

3歳の構文の発達の遅れがみられた。

4)「聴空間認知テスト」では、検査が実施できた2名(13歳児と15歳児)の反応については、聴覚情報の一部分しか認知していないため、場面の全体把握ができなかったり、音の種類把握は可能であっても、聴覚情報の時間的な推移や状況経過などが認知できていなかった。

2. 思春期・青年期の言語理解障害ケース

1) 症例1の聴覚・言語理解面の検査結果

聴力は両耳とも正常レベル、語音弁別能は両耳とも100% Token Test (聴覚的言語理解テスト)は91%の正答で、プロソディ認知は良好であり、末梢的な聴覚機能には問題がなかった。しかし、テレビの連続ドラマの筋を追うことができず、文章の意味理解が苦手であり読書を好まなかった。

2) 症例2の聴覚言語理解面の検査結果

聴力は両耳とも正常レベル、語音弁別能は両耳とも100% Token Test (聴覚的言語理解テスト)は97%の正答で、プロソディ認知は良好であり、末梢的な聴覚機能には問題がなかった。しかし、電話によるコミュニケーションが苦手であり、人から話しかけられた情報を、まとめて理解することが難しかった。記憶の評価の結果は、WAIS数唱課題では、順唱では5~6桁、逆唱では3~4桁可能、nonwords (無意味綴)の復唱は5桁可能、単語の把持は3~4語可能と直後記憶は平均よりやや低下していた。談話の再生では直後再生はほぼ可能であったが、遅延再生が困難であった。

考察:

1. 言語理解・表現力の遅れがみられたケースについて

1) 6名にみられた聴覚的言語理解障害について:

WISC-Rの算数課題では、文レベルの問題を聴き取り、必要な言語情報を記憶しつつ数の操作をおこなうもので、情報の継次的処理能力が必要となる。したがって数の操作は言うまでもなく、聴覚的言語理解や聴覚的メモリーに問題があると、算数課題が困難となる。単語や文レベルの聴覚的理解については、単語レベルでは、抽象的な語彙が具象名詞と比較して理解が遅れていた点や、文レベルの聴覚的言語理解において、構文の理解の発達が遅れていたことより、6名の理解障害の背景には、より高次の象徴機能の発達の遅れが考えられる。聴空間認知については、個々の聴覚情報を総合して、場面の状況を把握することや、聴覚情報の時間的な推移などを把握することが苦手であり、小学校低学年相当の情報処理レベルであると思われる。以上より、6名の聴覚的言語理解の障害の要因として、抽象語や構文の理解など高次象徴機能の発達の遅れと聴覚的情報の継次的処理能力が低いことが考えられる。

2) 聴覚的言語理解障害のある児への指導

言語理解障害のある子どもには、聴力レベルは正常範囲であっても、聴覚刺激に鈍感であったり関心を示さないケースや、自己中心性が強く、人の話に関心を示さず、傾聴態度に欠けるケースがある。このように聴覚的な感度が低下していたり、聴覚の感度は保たれているが、意味理解障害や記憶・注意などの問題によって聴覚的な言語理解に支障が生じてくる。

聴覚が積極的に活用できにくい場合には、その子どもの得意な感覚を通じて働きかけることが有効である。一般的には視覚や身体感覚を利用して、これらの刺激を聴覚刺激と共に呈示することにより、子どもの興味が促されることが多い。したがっ

て、傾聴態度が乏しく、言葉の理解力が育ちにくい子どもには、できるだけ視覚的にわかりやすく、見て楽しい玩具や教材を用いて、子どもの関心を促し、身振りなど身体動作も積極的に取り入れたかかわりが重要である。

2. 思春期・青年期の言語理解障害について

1) 聴覚的言語理解障害について:

幼少時には言語発達の遅れがみられていても、学童期を過ぎると、一般には日常会話には大きな支障は生じなくなる。しかし、日常会話に必要な言語レベルと、学校の学習や社会での職業に必要な言語レベルには、大きな開きがある。思春期や青年期に達した学習障害児のなかには、学校での学習や社会における職業生活を支えるに足る言語レベルを維持できていないことが多いのではないかとと思われる。

2) High-level languageの障害

Lethleanら(1997)は26歳~76歳の多発性硬化症例60名に、言語評価をおこない、次のように述べている。

①一般的な言語検査では問題はない。

②High-level languageテストでは、健常群と比べて有意な低下がみられる。例えば、両義にとれる文の理解、比喩的表現の理解、推論、物語の再生、語彙の豊かさ、意味論的課題などが挙げられる。

談話の内容についての理解では、Arnottら(1997)によると28歳~76歳の多発性硬化症例47名に談話の検査をおこなったところ、健常群と比較して談話の必要な情報が伝えられず不正確な・両義性のメッセージであったという。

Jennekens-Schinkelら(1990)がおこなった記憶と学習に関する課題では、17歳~73歳の多発性硬化症例39名に実施したところ、4割がsubnormalであったという。

3) 思春期・青年期の学習障害例への配慮

私どもが経験した2例においても、前述の1)と2)で述べたように、学業や職業生活に必要なレベルの言語力を有していないことが、学校や職場への不適応につながっていると考えられる。このようなケースに対して、周囲や社会が彼らに不足している部分を補ってかかわることができれば、さほど問題は起きないであろう。職業選択も、できるだけ本人の興味ある得意な領域で活躍できるように配慮する必要がある。19歳の例では、一般会社には不適応を起こしたが、造園業の仕事に出会ってからは、水を得た魚のように生き生きと仕事を続けている。一方では、本人自身もどのようにすれば自分の弱い点を補って、うまくコミュニケーションがとれるようになるか、努力と工夫が必要である。このような本人に対するアドバイスや援助がうまくなされるように、周囲の人々の理解と協力を得ることが重要である。

文献:

- 1) Arnott, W.L. et al.: Narrative discourse in multiple sclerosis: an investigation of conceptual structure. *Aphasiology*, 11: 969-991, 1997.
- 2) Jennekens-Schinkel et al.: Memory and learning in outpatients with quiescent multiple sclerosis. *J. Neuro. Science*, 95: 311-326, 1990.
- 3) Lethlean, J.B.: Performance of subjects with multiple sclerosis on tests of high-level language. *Aphasiology* 11: 39-57, 1997.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:学習障害児の言語障害と指導について検討するにあたり、話しことば(聞く・話す)の特異的な学習困難を示すいわゆる言語性 LD の聴覚的言語理解の問題について検討を行った。幼児期の言語発達の遅れ・算数課題の低下が共通しており、聴覚的言語理解障害の要因として、抽象語や構文の習得など高次象徴機能の発達の遅れ、聴覚的情報の継時的処理能力の低下などが考えられた。さらに思春期・青年期に達した学習障害児の聴覚的言語理解障害について検討を行い、その背景に聴覚的言語記憶の問題や談話の理解と表現の問題などいわゆる high-level language の障害が考えられた。指導法については、個々の子どもの状態に合わせ不得意な聴覚面を視覚面や身体感覚で補い、身振りや絵・文字などを取り入れるなど、子どもの得意な面を活用していくことが必要である。